

「1905 年能海寛横死報道と日本人のチベット観」

タイトル	「1905 年能海寛横死報道と日本人のチベット観」
著者名	高本康子
雑誌名	能海寛研究会機関誌『石峰』
号	第 10 号
ページ	6－11
発行年	2005.6.15
E-mail	Sekihou@hazaway.com (能海寛研究会)

ISSN 1883-4183



中国僧姿の能海寛

能海 寛 略歴

能海寛 法名法流。 石峰と号す。明治元年 5 月 18 日島根県浜田市金城町長田（当時は東谷村）浄蓮寺に生まれる。12 歳で得度し、慶応義塾と哲学館に学ぶ。恩師南條文雄師の意思を継ぎチベット探検の論文『世界に於ける佛教徒』を発表すると共に語学の研究と山岳登山による体力の練磨をなす。郷里にあつては地方史を編纂して和歌を詠み、益田沖の高島にて寺小屋を開設する。哲学者、探検家、宗教家として釈迦直伝の大蔵經の經典を求め英訳經典世に出す目的で当時鎖国中であつたチベットへ求道のため身を挺し仏教巡礼探検を実践した功績は偉大で有言実行と用意周到さは後世に幾多の教訓を残す。その苦難の 34 年の生涯に「般若心經」西藏文直訳（梵・藏・漢・英）など四巻が著書として永遠に伝う。

1905年能海寛横死報道と日本人のチベット観
東北大学国際文化研究科
高本康子

1.はじめに

明治時代に入蔵を目指した東本願寺の僧侶能海寛については近年、特に能海寛研究会機関誌『石峰』が創刊された1995年以降、調査研究成果が着実に蓄積されてきた。本年（2004年）には、地元金城町に残された膨大な能海寛資料を総括した『能海寛著作集』の刊行が開始されるに至り、能海寛研究の更なる展開が見込まれる。従来の能海研究は主に、能海個人の事績を詳細に解明しようとするものであり、従って今後は、これらの研究の成果をふまえた、能海と各時代の日本とのより広い意味での関連を捉える研究が必要とされると思われる。私の能海への関心は、能海寛という人間像が、各時代の日本においていかなる意味をもったかにある。明治から現代に至るまで、人々は能海寛をどのように見ていたのか、そしてそれはどのような意味をもっていたのか。本稿はこのような視点にたって、能海寛の「横死」の意味を検討しようとするものである。

能海は多くの場合、入蔵者として語られてきた。それゆえに、彼について書かれた新聞や雑誌の記事、本の記述などは、彼についての情報であったと同時に、チベットに関する情報でもあった。能海が生きた時代から現代にいたるまで、彼は日本において「チベット」が語られる場合の、重要なトピックであり続けたと言えよう。しかも彼の同時代においては、しばしばそれらは最新のチベット情報でもあった。

チベット情報がまとまった形で日本人に紹介されたものとしては、能海と同じ東本願寺派に属する学僧小来栖香頂の『喇嘛教沿革』が嚆矢とされる⁽¹⁾。しかしこれは、東本願寺の中国布教事業の参考書として書かれた書であり、チベット仏教に関心を持つ限られた人々以外にも広く読まれたものとは言い難い。チベット情報が、学者や僧侶といった専門家以外の、より多くの日本人にアクセス可能なものとなったのは、1900年代に入ってからだと思われる。新聞という情報媒体上に、まとまった量のチベット情報が出現するのがこの時期であるからである。特に、1903（明治36）年、3か月間にわたって『時事新報』、『大阪毎日新聞』に連載された河口慧海のチベット旅行談は、空前絶後の規模を持つチベット事情の紹介記事であったと言える⁽²⁾。翌年には『西藏旅行記』が出版され、新聞連載と同じく、世論の絶大な関心を呼んだ。

日本人にチベット事情を紹介したものとして、河口の旅行談の次に注目すべきなのが、1905（明治38）年の能海寛の横死に関する報道である。河口が1903（明治36）年に、チベットの首都ラサへの潜入に成功した日本人として華々しく登場するまで、新聞や雑誌に、入蔵に挑んでいる日本人として真っ先に名前を挙げられていたのは、河口ではなく、能海寛であった。「川口慧海其他二、三西藏探険に志されし邦人の中最先鞭を着け最も以前より西藏探険を心懸けし人を能美寛氏とす」⁽³⁾という記述からもわかるように、ラサ潜入に成功しチベット探検家として一躍有名になった河口も、帰国するまでは入蔵に挑む日本人の中ではむしろ後発に属する人間と考えられていたのである。一般の人々向けのものとしては新聞紙上において初めてのチベット事情紹介となった1901（明治34）年の阿嘉呼図克図来日報道において、能海の名が挙げられ、チベットへの彼の挑戦の様子を通じて、チベット事情の一端が語られていることにも、チベットに関係する日本人の中で、能海がいわば代表格のような、主立った存在として捉えられていたことがうかがえる⁽⁴⁾。

1901（明治34）年4月の雲南省大理からの書簡以降、能海の日本への通信は途絶える。その後、能海の実家島根県金城町浄蓮寺の檀家の一人が、能海が雲南の奥地、「西藏界」⁽⁵⁾で現地住民に殺された、ということを目撃し、能海が父浄蓮寺住職能海謙信に書簡で知らせたのがきっかけで、1905（明治38）年7月、彼の消息不明が新聞や雑誌に大きく報じられた。これ以降彼の行方不明は、非業の死として語られていくこととなった。

河口慧海のチベット旅行談が連載されたのが1903（明治36）年、旅行記『西藏旅行記』が出版されたのが1904（明治37）年、そして能海が殺された、というニュースが新聞や雑誌に大きく報じられたのが1905（明治38）年である。本稿では、この点に注目し、世上の大きな関心と呼んだ河口の旅行談発表のわずか一年後にあたる、以後能海の悲劇的な死が伝えられていく最初となったこの1905（明治38）年の報道を取り上げ、これがどのような意味を持ったのか検討する。

2.1905（明治38）年の報道

1905（明治38）年7月22日付の東京・大阪各紙は一斉に、「西藏探検家」能海寛の受難を報じた。いずれも彼が、「西藏国境」で、「土人」に虐殺されたと伝えている。その後も能海の履歴やチベットへの挑戦の経緯、雲南から発せられた彼の最後の書簡などが、詳細に紹介された。それらの記事では、「満州軍軍政部長井戸川少佐」⁽⁶⁾が人づてに入手した情報によって、彼の死の様子が判明したとされている。彼の死の現場を直接確かめた人物が誰であるかは「今読者に報知し得ざるを憾みとす」⁽⁷⁾等と明確に報道されないにもかかわらず、彼の履歴や死に臨んだ様子、現地から最後に日本へ発信した書簡の内容などが詳細に記事にされた。以下の記事は、この報道を1ヶ月余り後に振り返ったものであるが、当時の報道の様子がうかがえる。

一たび能海君死去の報が伝はると、天下の新聞雑誌は争うて哀悼の意を表し、その半途にして斃れたるは、実に学界の一大損失であるとまで、絶叫したのもあつた位で、肖像や経歴は言ふまでもなく、その性行から功績まで、大概紹介し尽されたと言つてもよい（米峰「能海寛君を悼む」『新仏教』第6巻第9号、1905（明治38）年9月1日発行、667-670頁）

ところがこの能海横死は誤報であつたことが、8月下旬になって各紙に報じられた。情報の出所とされた井戸川少佐が、能海の死の真相、そして自身がその情報源であつたことをも否定している手紙が新聞紙上で公開されたのである。その結果、「誠に芽出度事ながら能海氏の消息は三十四年四月以後杳として知るに由なし」⁽⁸⁾というように、能海の死の真相は謎のままに残されることとなった。

3.能海の「横死」

各紙は記事中において能海を「西藏探検家」と呼んでいる。能海の名前にチベット、と冠されることで、能海の横死という出来事が何の根拠もないままにチベットに結びつけられていっていることを、ここでまず指摘しておきたい。事件が起きた場所が特定されないまま、漠然と「西藏境」などとされていることにも、能海と言えばチベット、と決めつける傾向が存在したことが見て取れる。

次に注意したいのは、彼の死がいずれも、「辞世の歌一首を大書して従容死に就きたり」というエピソードとして語られることである。例えば『読売新聞』では以下のように報じられている。

辛酸拮据漸く西藏国境に至り一旅寝に投せしに遂に土人の看破する処となり
激怒憤恚し白刃を擬して君に迫りしかば暫時の猶予を乞ひ立つて白壁に麗々しく
『大日本帝国石見国那賀郡波佐村能海寛此処に於て土人に虐殺せらる』と書して
座に就き瞑目すれば閃めく毒刃の下頭ハ千秋の恨みを載せて落ちぬ時ハ三十六
年十二月中旬なりし（「能海寛氏の最後」『読売新聞』1905年7月23日付）

この記事中では、彼は、残虐な原住民に捕らえられ、処刑される前に辞世の歌を詠んで壁にそれを書き付け、あたかも斬首の刑に臨む武士のように静かに殺されていったとされている。この彼の死の様子が、「縦容土人が獐猛なる凶手に斃れた」⁽⁹⁾勇敢な仏教僧の潔い最後、というまるで志士の切腹のような一場の物語にされてしまっていることは、一月後にこの横死報道が誤報であつたとされた時の雑誌記事に、明確に指摘されている通りである⁽¹⁰⁾。

壁に辞世を書き付くる所など、何やら演戲的の感あり、其の間獐惡なる土人が虐殺の刃を猶予せしが如き、又宿屋の主人が壁上の落書を其儘に為しおき

が如き、余程小説的

(「能海寛氏の生死」『東洋哲学』第12編第8号、1905(明治38)年9月5日発行、564-566頁)

しかしここで筆者が特に注目したいのは、上の引用中に言われている、「演戲的」、「小説的」な点である。なぜなら、前年に一大ブームを起こした河口のチベット旅行談が、「魂飛び肉躍らしむ」「空前の大活劇」⁽¹¹⁾として評判を呼んだものであったからである。この旅行談において語られたのは、慧海が重い荷物を背負い、たった一人で険しい雪と氷のヒマラヤを越え、氷の河を裸で渡り、襲いかかる猛犬を振り払い、猛獣がうろつき強盗が横行する荒野を踏破して、高名な欧米人探検家たちがいずれも失敗しているラサへの潜入に成功する話である。更に、河口がラサで医者として大成功を収め、ダライラマに拝謁を許されるほど出世する様子や、知恵と勇気によって様々な妨害を乗り越え、貴重な仏典とともに、人々が待つ神戸に到着するに至るさまが活写されている。チベットは、この河口の「活劇」にふさわしい舞台として描かれていたのである。

この河口の旅行談に示されたチベット・イメージを考えると、チベットに関連する出来事としてのリアリティを得るために、能海横死はまさしく、冒険活劇の中的一幕、それも河口旅行談で語られた冒険の舞台チベットにふさわしい形で復元されなければならなかったのだと思われる。能海横死のこのエピソードが「演戲的」、「小説的」であることには、能海に関連する場所と言えばチベットであり、チベットと言えば「空前の大活劇」、という連想の回路が、新聞記事の書き手にも読者にも共有されていたことを示している。

4. 妻静子の人間像

そしてこの勇敢な仏教僧の物語をより引き立てるものとして報道されるのが能海の妻静子の物語であったと思われる。静子については、能海との結婚の経緯や、夢に夫の帰還を見る話、再婚を勧められても決して受け入れず、夫の留守をけなげに守り続けていることなどが以下のように伝えられている。

能海と静子の結婚は、チベット行きの意志をまげない能海を心配した彼の両親の勧めで実現した。しかし能海は結婚によってもチベットへの志を捨てず、静子もまたその夫の意志を支持した。結婚後数日でチベット行きのため、能海は静子を残して上京する⁽¹²⁾。能海は恩師南條文雄にも、チベット行きを制止されるのを恐れて結婚を告げておらず、南條は能海の行方不明が発覚して以後、上京して来た静子に会って初めてその事実を知った。なぜチベットなどを目指す男と結婚したのか、という南條の問いに、静子は「健気なる物語」を語り、南條を感嘆せしめた⁽¹³⁾。ある晩、「罪人」のような姿で担架に乗せられて帰ってくる夫の姿を夢にみて、静子が心配していたところ、今回の悲報がもたらされた⁽¹⁴⁾。その後も彼女は親戚に勧められる再婚話を受け入れず、夫を待ち続けている⁽¹⁵⁾。静子について記述される内容は以上のようなものである。

これらの記事の中に描かれた、チベットへと夫を送り出す気丈な妻、夫の大志に対して深い理解を持つ賢い妻、そして再婚を勧める周囲の声に耳もかさず夫を待ち続けている忠実な妻、といった静子像は、その後の報道でも繰り返されていく⁽¹⁶⁾。この静子像は、能海の悲劇的な最後についての物語の中で、能海の偉大さを更に際立たせる役目を果たしていると思われる。能海の間人像において彼の偉大さが強調されればされるほど、その偉大な彼が命をかけて挑んでいる入蔵の困難さが際立ち、また入蔵の困難さが強調されれば、それに挑む能海の偉大さが際立つこととなった。上述のような静子像は、このような相乗効果を生む機能を持った装置であったと考えられる。

5. 能海寛像を通して描かれたチベット

1923(大正12)年7月8日、京都発行の仏教系新聞『中外日報』紙上に、寺本婉雅の署名が付された「故能海寛君遭難の真相 支那雲南省クーソン族の惨殺」という上・中・下3本の連載記事が掲載された。これによると、1922(大正11)年4月17日、寺本のもとを、龍谷大学教授本田義英とその「知人」⁽¹⁷⁾で入蔵を希望する郷間正平とが訪ね、チベット情報の提

供と、ダライラマへの紹介状の執筆を依頼した。寺本はこれに応じ、あわせて能海「遭難地」（上記記事中の表現）の調査を郷間に依頼した。翌年1923（大正12）年7月3日（記事の5日前）、本田と郷間が再び寺本を訪ね、入蔵には失敗したが能海の「遭難地」は確定できた旨報告した。これを寺本は「郷間氏の直話」として『中外日報』紙上に発表した、というのが記事中に説明されているこの連載の経緯である。

記事タイトル「故能海寛君遭難の真相 支那雲南省クーソン族の惨殺」からもわかるように、この記事において、能海が「遭難」したこと、「クーソン族」に「惨殺」されたことは、全く疑いの余地がない前提となっている。寺本は能海の「遭難地」の調査を依頼したのであって、能海は雲南のどこかで非業の死を遂げたということが、動かしがたい前提だったことが、ここから読みとれる。その上で郷間の報告によって「遭難」の詳細が語られる。

郷間の話は、能海が行方不明になったとされている雲南省のチベット国境付近に郷間が足を踏み入れるところから始まる。そこには「クーソン族」という「質性極めて獐猛」な部族が盤踞しているとされる。彼らは、「弁子の蓬髪にて、毛衣を被り、長剣を帯び、常に鎗銃を携へ、年中藻浴せざる蕃族」で、彼らの居住地域は「太古の生活を其儘に今も尚続けてゐるから尤も危険である、彼等の諸部落を突破せんには到底单身旅行者の企て及ぶところではない」「蕃巢」と描写されている。しかも、「峨々たる巖壁は天空を摩し、高峯一万尺に及びては降雪寒風肌を劈き、鬚髯凍り、転々行歩難」という厳しい自然環境が、旅行者の行く手を阻んでいる。郷間はそこを「一步一步は恰ど死地に入るの心地」で越え、能海が殺されたとされるある山腹にたどり着いた。彼は、能海が「獐惡なるクーソン族の毒手にかゝつて惨殺せられた」場所を確認し、現地の岩面に「大日本能海寛師遭難地」と刻ませ、あわせて香華を手向けた。彼がこの場所を特定するにあたって根拠とした情報は、近くの集落に麝香買い入れのため滞在していたフランス人「ペーロ」氏から入手したもので、この「ペーロ」氏自身は以前この地方に滞在していた「仏人宣教師」から直接聞いたものだという。郷間の話はここで終わる。

寺本はこれに続けて、能海の勇気とその志の壮大さを讃え、更に、1917（大正6）年に発行された『能海寛遺稿』所載「教界時事紙 明治三十六年十一月刊行」と彼が添記するところの新聞記事中の、能海横死に関する部分を紙上に引用する。

氏は猛烈なる土人の包囲を受け、或は棍棒を以て、或は鉄叉を以て処きらず袋叩きを蒙り、身に重傷を負ひ、辛うじて一家にまろび込み、辞世を遺して瞑したる

以上の記事の内容からは、1905年に「辞世の歌一首を大書して従容死に就きたり」と伝えられた能海の横死が、より詳しく具体的に語られていっているのがわかる。この記事では、能海が、どのような場所で、どのような人々によって、どのように殺されたのかが、郷間の「実地踏査」情報によってより具体的に肉付けされた結果となった。しかもその肉付けは、より「演戲的」、「小説的」に能海の「横死」を演出する方向に施されたものであったと言える。

このような能海寛像は、当時の人々のチベットに対するイメージに、どのように影響したのだろうか。「西藏探検の能海寛氏一昨年土人に虐殺さる事実発見惜む快男児骨を雪山に埋む」⁽¹⁸⁾と寸評されたように、報道の中で描かれた能海の悲劇はまさしく、「快男児骨を雪山に埋む」と言うべきものであった。ここでは、この快男児の命を奪ったのが、残虐な現地民であり、また過酷な犠牲を探検家に強いるチベット探検であったとされている。チベットは単なる「世界の秘密国」⁽¹⁹⁾から、「世界中の神秘国として幾多探検家の生命を犠牲とせる西藏」⁽²⁰⁾、つまり能海が遭遇したような苦難、払ったような犠牲を乗り越えなければたどり着けない国に変化したと言える。

1905年に報道された能海「横死」は結果として、「多く質直ならず、徒らに大言愚人を瞞するの態あり」⁽²¹⁾と評されていた河口旅行談に語られたチベットの一部分を、裏付けることとなったと言える。『万朝報』の、「川口慧海西藏より帰るや世ハ一時彼の言を疑はんとしたり、彼が揚言せし処によるも西藏ハ中々容易に入れぬ世界の秘国なり此地に入りて終に探險

の犠牲となりたる能海寛氏が去三十四年四月最後の通信を故国に送り来り」⁽²²⁾という記述からも、河口旅行談に描かれた、チベットが危険な場所であるというイメージを、能海の実験の物語が裏付けてみせた結果になったことが見て取れる。

その直後彼の死が誤報であることが判明したにもかかわらず、彼の「横死」つまり非業の死は彼を語る場合の前提としてそのまま受け入れられていった。1923（大正12）年の記事については、上で見た通りである。その他にも、例えば、1933（昭和8）年に刊行された『東亜先覚志士記伝』所載の「支那に於ける我が宗教家の行動」にも能海について、「志を達せずして残虐なる土人の兇剣に斃れたのは、実に千秋の恨事」⁽²³⁾と記述されている。1905年の報道は決定的に、能海の人物像を「勇敢にチベットに挑み非業の死を遂げた日本人」化したと言える。これは山口瑞鳳によって「チベットに傾倒した日本人、チベット文化に対して当時最も深い理解を持った日本人」である能海像が見いだされるまで、最も有力なものだったと言っているだろう。

能海は多くの場合において、河口と対比されて語られていっている。1905年当時だけではなく、時間を隔ててもこの対比の図式は受け継がれていっている。例えば上述の『東亜先覚志士記伝』においても、冒頭、「慧海の帰朝によりて秘密境西藏の実情が明かにされ、当時の人身に多大の感動を与へたのであるが、能海寛が明治三十一年十一月日本を發して西藏探検の途に上り、途中幾多の障碍に遭ふも百折撓まず、前後四年間に亘る難行苦行を重ねて遂に蛮境に非業の死を遂げた事実に至つては案外世人に忘れられてゐるやうである」（503-4頁）と、河口と対照しつつ紹介されていることに、それは充分見て取れよう。

現代においても、能海の入蔵が振り返られた場合、この対比が使用されることに変わりはない。現代においては更に、新しい側面が付け加えられている。1905（明治38）年当時見られたのは、独立独歩チベットへの道を歩んだ河口に対して、当代きつてのサンスクリット学者南條文雄の指導下にチベットを目指した能海、華々しい成功をおさめた河口に対し、悲劇的な死を遂げた能海、そのチベット報告を法螺話とも揶揄された河口に対して、ヨーロッパで学んだ南條仕込みの知識を持ち、それゆえに学術的にも評価される成果を期待されていた能海、等というものであった。

現代ではこれらに加え、チベット文化を野蛮人の文化としか見ようとしなかった河口と、チベット文化を高く評価しそれに憧憬を抱いていた能海、という対比が新たに形成されている。例えば、2003年に出版された『チベットと日本の百年』⁽²⁴⁾にも、能海と河口の入蔵について記述される部分の小見出しに、「チベットに傾倒した能海寛、冷静だった河口慧海」という表現が使用されている。これはこの対比を典型的に示すものだと言えよう。

能海像は1905年以降現代に至るまで、以上に見てきた、河口との対照図式にそって語られて来たと言える。彼らそれぞれの人間像が、どの点においても対立的に提示されていたにもかかわらず、能海に関する報道、そしてそれによって描き出された能海像は、河口旅行談における「危険なチベット」の証明となった。すなわち、「使命のためには命をも省みない勇敢な日本人」能海寛像を通して、チベットには、容易に入れない、危険な場所という意味づけが行われ、「世界中の神秘国として幾多探検家の生命を犠牲とせる西藏」⁽²⁵⁾というイメージが確立されたと思われる。能海の「横死」は、それが事実であったか否かということとはかわりなく、日本人の間に「危険なチベット」というイメージを共有せしめる、重要な挿話であり続けたのだと言えよう。

注

(1) 江戸時代後期の北海道などの探検で有名な近藤重蔵に、漢文文献を情報源とした『喇嘛考』という小著作があるが、まとまった形で、しかも実地の見聞が織り込まれたものとしてはやはり、小来栖香頂の『喇嘛教沿革』が最初のものであると言える。これについての詳細は山口瑞鳳『チベット』（上巻、東京大学出版会、1997年）参照。

(2) 『時事新報』では「世界の秘密国」と題し1903年5月31日-10月15日、計138回（但しこれに続けてチベット入国に至るまでの旅程を語った「比馬拉亞の山籠」が10月16日から11月1

日まで計17回連載されている）、『大阪毎日新聞』では「大秘密国の探険西藏経歴談」として1903年5月31日-10月16日、計139回連載された。この他にも各紙がこぞって彼のチベット旅行について報道し、その過熱ぶりは一大ブームとでもいうべきものであった。当時の状況については、高山龍三『河口慧海一人と旅と業績一』（大明堂、1999年）、奥山直司『評伝河口慧海』（中央公論新社、2003年）参照。

(3)「探険家能海寛氏殺害せらる」『東京日日新聞』1905（明治38）年7月22日付。

(4)例えば『読売新聞』のチベット特集記事「西藏雑談」（1901年7月21、22日付）。

(5)これは、「能海寛氏の生死」（『東洋哲学』1905年9月5日発行）564頁所載の「浄蓮寺の檀徒にして目下出征中なる岡田利喜太氏より寛氏の家厳謙信師及び同寺檀家総代小林氏に送りし左の書信」中に見える表現である。

(6)「西藏探険家能海寛の最後」『万朝報』1905年7月22日付。この情報源となった人物については他に、「満洲軍某部長井戸川少佐」（「探険家能美寛氏殺さる」『東京朝日新聞』1905年7月22日付）、「満洲某軍政部長井戸川少佐」（「探険家能海寛氏殺害せらる」『東京日日新聞』1905年7月22日付）、「在満洲軍務署長井戸川少佐」（「能海寛君を悼む」『新仏教』1905年9月1日発行、667頁）、「井土川少佐」（「能海寛氏の生死」『東洋哲学』1905年9月5日発行、564頁）などと伝えられている。これは陸軍士官学校1890年卒で、日清戦争前後に清国応聘将校として四川省成都で清側の軍事顧問を務め、日露戦争中は特別任務班として満蒙地区で特殊工作に従事した井戸川辰三を指すと思われる。

(7)「探険家能美寛氏殺さる」『東京朝日新聞』1905年7月22日付。

(8)「能海寛師訃音の訃伝」『読売新聞』1905年8月24日付。

(9)「西藏探険家能海寛の最後」『万朝報』1905（明治38）年7月22日付。

(10)これに先だって、『時事新報』では、この「演戲的」に類する表現こそ使用されていないが、すでに7月25日付の段階で、「残忍暴戾」の土人が能海が辞世の和歌を書き終わるまで待っていてやるなどという「呑気なる事」は考えがたいと指摘している。

(11)『大阪毎日新聞』1903年6月4日付広告。

(12)これに関しては、以下のような記述を参照した。「結婚後幾許ならずして家督を末弟登氏に譲り其身は再び出京して南條氏及び他の知友等に告別し其十一月十日断然西京丸に塔じて万里遠征の途に就きたるなり」（「西藏探険家故能海寛氏」『東京朝日新聞』1905年7月23日付）。

(13)これに関しては、以下のような記述を参照した。「氏の両親は深く之を憂ひ屡思ひ止まる様訓戒なしたれど氏はいつかな聞入れず切に乞ひて漸く許しを受けたる由にて、此時の許容条件として静子との結婚式を断行せしものなりと、故に氏は南條博士に対しては深く妻帯の事を包み单身孤独を粧ひ居たる位なりしが、氏出発後両親等の心痛大方ならざるより既掲の如く静子をして出京せしめ博士の邸を訪ひて氏を聞きしめしたため博士は初めて氏の妻帯なりし事を知り静子に対して斯かる冒険事業を企つる人と結婚せし理由を尋ねしに静子は流石に偉丈夫の妻丈けありて志操も堅く博士に向つて健気なる物語をなせしかば博士は一方ならず其心情に感ぜり」（「西藏探険家遭難事件」『東京朝日新聞』1905（明治38）年7月25日付）。

(14)これに関しては、以下のような記述を参照した。「静子は覚悟の上とはいひながら良人が音信不通も四カ年越となれるより大に心痛なし居たる折柄一昨年十二月夢に良人が罪人の如き姿となり担架に乗せられて悄然と帰り来れるを見しより益其身を思ひやり安き心もあらざりしに其後何かと不吉の兆のみ現はるゝより扱は途中にて無念の死を遂げたまひしか心許なき限りよと只管便りを待ち居たる」（「西藏探険家遭難事件続聞」『東京朝日新聞』1905年7月24日付）。

(15)これに関しては、以下のような記述を参照した。「夫人が夫が出立の際「例へ私の消息が絶えても十年間は何処かに生きて居るから安心せよ」と云ひし言葉を信じて臆せず今は石州浜田の実家に居るが能海の親戚我が家の親戚等の間に頻りに再婚問題が持上つても十年は愚かまだ二三年しか経ちませぬとどうしても肯ぜぬ由」、「静子と婚礼の式を挙げ其後幾日もなく探険の途に上りたるなり」（「西藏探険僧の行方」『読売新聞』1908年10月8日付）。